The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	藤原登子について
Author(s)	島田, とよ子
Citation	詞林. 1989, 5, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67266
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤原登子について

島田　とよ子

一

藤原登子は、藤原師輔と藤原盛子の間に二女として誕生した。師輔は三人の内親王を妻としたが、盛子は受領階級出身であった（「尊卑分脈」）。

師輔が盛子を妻としたのは、「少日之旧契」（「願文集」）とあるように、彼の若い頃であった。恐らく、これが師輔の最初の結婚であろう。盛子所生の伊尹が師輔の十七歳のときに生まれている。伊尹の他に盛子所生は、「尊卑分脈」によると、兼通・兼家・忠君・安子・登子・三女源高明室である。「大鏡裏書」では、怤子も盛子所生としている。盛子五七日の願文には四男五女（「願文集」）とあるから、女子一人が不明である。「尊卑分脈」には、六女と七女に母を記していない。六女（繁子）は甥の道兼室になっている。彼女が盛子所生だとすると、彼女は盛子薨去の天慶六年以前に生まれているとしなければならない。そうすると、彼女は夫の道兼(1)より十八歳以上の年長になるので、六女が盛子所生であるとは考えにくい。では、七女であるが、「尊卑分脈」の藤原氏系図では重信の妻になって道方を生んだことになっているが、源氏系図の道方の母を見ると、師輔女と高明女の両説が掲げられている。「公卿補任」は高明女を道方の母とする。或は、高明女が母を師輔三女とすることから混同し、誤写されたのではないだろうか。私は、「九暦抄」の天徳元年十一月二十七日の条に、師輔の五人の息子達が臨時祭の舞人に選ばれていながらとりやめになった理由として、「依妹喪」としている、この「妹」が盛子所生ではなかったかと思う。この人は、「大鏡」に「四の君はとくうせたまひにき」と記される人と同人と考えてよいだろう。「尊卑分脈」では怤子を四女に掲げるが、「大鏡」では「六の君、冷泉院の東宮におはしましに、まゐらせたまひ」と、怤子を六女とする。重信室道方母には疑問が残るが、「尊卑分脈」では天徳元年卒去の娘を落としているから、師輔の娘の数をもう一人増やす必要がある。

登子の異母兄弟姉妹も掲げると、遠量（母右大臣顕忠）・遠度（母常陸介公葛女）・遠基（母同遠量）・高光（母雅子内親王）・為光（母同高光）・公季（母康子内親王）・尋禅（母同高光）・深覚（母同公季）・愛宮（母同高光）である。六・七女については既に述べた。

盛子は天慶六年春から重態におちいり、九月十二日に薨じた（「願文集」）。享年は未詳。ときに、登子は十歳位であったと思われる。彼女は生涯の中に肉親の多くと死別するという不幸に遭っているが、多感な少女期の母の死は登子の人格形成に必ず陰を落としているだろう。

二

登子と重明親王の結婚は、親王が「吏部王記」に記している。

夜詣右丞相坊門家、娶公中女（天暦一・十一・二十二）

結婚は、重明親王が師輔の九条坊門家に登子を訪い、二十四日には三日の祝儀が催され、成立している。祝儀には師輔の同母弟師尹（ときに従三位権中納言兼左兵衛督）・師氏（ときに従四位上参議兼右衛門督）、嫡男伊尹（ときに従五位上左少将）等が列席している（「吏部王記」）。

重明親王は醍醐天皇の第四皇子で、母は大納言源昇の娘である。親王は登子と結婚した天暦二年、四十三歳であった。師輔より二歳上になる。登子は、時に、十四、五歳であったろうと推測されるが、親より年上の重明親王と結婚したことの裏には師輔の計算があったのだろう。猶、登子の年齢は、安子の結婚年齢、当時の適齢期、そして重明親王室寛子卒(2)後四年程して登子が後妻に入っている等を考慮して推測したものである。

親王前室寛子は藤原忠平の次女で、親王とは同年であった。忠平が親王を娘婿にえらんだということから、親王は醍醐皇子の中でも重んじられていたと推測されるし、又、忠平の婿になって一層重んじられるようになったことであろう。崩御の間際、醍醐上皇は忠平、代明親王、そして重明親王に「不可上諡号、及以左大臣為太政大臣、醍醐寺施入供米宛年分度者之由」を遺詔されている。このことは、重明親王が醍醐上皇のご信任を得ていたことを示すであろう（史料纂集「吏部王記」解説）。

登子が重明親王の後妻に入った時、親王は三品中務卿であった。翌翌天暦四年には式部卿に就任している。中務卿就任は承平七年、朱雀天皇の御世のことで、式部卿就任は村上天皇の御世のことである。両天皇とは異腹ではあるが、生存する最年長の兄として厚遇されていたと思われる。

ところで、師輔は醍醐天皇の皇子女との関係が強い。前述したように、三人の内親王（勤子・雅子・康子）を妻にしている。又、長男伊尹に代明親王の娘（恵子女王）を、次男兼通に有明親王の娘（能子女王）を、長女安子に成明親王（村上天皇）を、登子に重明親王を、三女に源高明を合せている。師輔は天皇の

姉や兄と結び付くことによって、天皇との結び付きを強め、世間的には格上げの効果を狙ったのであろう。

結婚後の登子については、「九暦逸文」に憲平親王（冷泉院）三七日夜の贈物をしていることが記されている。三七日夜というと、結婚後一年半になる。憲平親王のご誕生は九条家の将来の栄華を約束するものであったから、姨に当たる登子にも非常にめでたいことであったに違いない。これが現存する師輔の日記に登子について記された唯一の例である。

新婚の頃かと思われる興味ある事件が「斎宮女御集」に記されている。

ちゝ宮のおはしける時に、はゝうえの御かたちなどを、いまのきたのかたにかたりきこえたまひて、御くしのめでたかりしはまたあらむやとて、とりにたてまつりたまへりければ

からもなくなくなりにしきみかたまかつらかけもやする

とおきつゝもみむ

とて、たてまつらせ給はす

重明親王が登子に亡き寛子の容貌などを話し、髪の素晴らしさは抜群であったと言って、徽子女王のもとに形見の髪を取りに遣らせたが、女王はそれを断わった、というものである。斎宮女御と称された徽子女王は重明親王と寛子の間に長女として誕生した（「本朝皇胤紹運録」「本朝世紀」天慶元年・九・十五）。従って、女王にとって登子は義母になる。「この歌は、単に母の形見の髪を手放して損なわれるのを恐れただけではなく、今の北の方に亡き母の髪を見せたくない、娘の義母に対する気持を詠んだものとかんがえられる」（「斎宮女御集注釈」）と述べられるように、継娘と義母の微妙な関係が露呈している。最も、徽子女王は重明親王と登子の結婚より一月遅れて村上天皇の許へ入っている（「吏部王記」天暦二・十二・三十）ので、登子と徽子女王が家庭生活の場で深く関わり合うということはなかったろう。のちに、この義理の母子は村上天皇を挟み、男女間のことで対立することになる。

ところで、重明親王から亡き寛子の容貌、抜群の髪のことを聞かされ、その髪を見せようとまで言われて登子はどう思ったろうか。旧妻に対する新妻の気持も又、微妙であろう。夫から旧妻の美点を聞かされるのは気持のよいものではなかったろう。ちなみに、「枕草子」（にくきもの）に「我が知る人にてあるほどの、はやう見し女のこと、ほめ出だしなどするも過ぎてほど経にたれどなほにくし」とある。重明親王はどういうつもりでそんなことをしたのだろうか。寛子が登子の伯母 に当たるからだろうか。何か、親王が登子をひどく子供扱いにしたような態度に感じる。前に登子の年齢を十四、五歳と推測したが、この話からもそう思える。

重明親王は天暦八年九月十二日に四十九歳で薨じた（「扶桑略記」）。「斎宮女御集」に、

みし人のくもとなりにしそらわけてふるゆきさへもめつら

しきかな
と、登子が親王の薨去を悼む歌を詠んでいる。

親王の薨去によって六年間の短い結婚生活に終止符が打たれ、登子は若くして未亡人となった。二十歳か二十一歳かであったろう。親王との間に二女を設けている。

三

登子が村上天皇の寵妃となるそもそものきっかけは、彼女の同母姉安子が女御として入内していたので、宮中の珍しい物見に参内していたところ、村上天皇の目に止まった、というものである。そして、安子黙認の下に二人は通じてしまう。ここ迄の叙述は大体、「栄華物語」も「大鏡」も同様であるが、この後、安子崩後に登子が入内するまでの間、二人の関係は「栄華物語」では安子が不快を示したので中断があるとするが、「大鏡」では連続していたような叙述(3)で、両者に相違が見られる。

登子の異母弟高光の出家を描く「多武峯少將物語」に、

式武卿の北の方、ひとりおはすれば、ことなることおはせねど、人のものし給ふに思ひしりてもあらねど、ふすまたてまつり給ふ

と、登子はひとり住みの身であると述べられている。ここは、登子が横川山中に籠る高光に夜具を贈るところで、彼が出家した翌年、応和二年五月のこととしている。応和二年五月と言うと、安子崩御の二年前になり、この時、登子がひとり住みの身と言われていることは、彼女と村上天皇の間に交渉が無いことを示しているようで、「栄華物語」の叙述に叶うが、登子と村上天皇の関係があっても密通と言うものであれば、登子をひとり住みの身と言うことはあるだろう。

「斎宮女御集」に重明親王薨後の登子について触れたものがある。

ちゝ宮うせ給て、さとにおはする内侍のかみの御こゝろのおもはすなりけるを
いかにしてはるのかすみになりにしかおもはぬやまにかゝるわさせし

詞書の「御こゝろのおもはすなりける」、又、歌句の「はるのかすみ」「おもはぬやまにかゝる」とは、登子が村上天皇と関係をもつようになったことを言ったものと思われる(4)。前述したように徽子女王には村上天皇は夫であり、登子は義母であったから、村上天皇と登子の関係はことに不愉快であったろう。これを「天暦九年春か」（「斎宮女御集注釈」）と推測されている。だとすると、重明親王薨去の時、「みかど人知れず今だにと嬉しうおぼしめせど、みやにぞ憚りきこえさせ給ける」と、村上天皇はこの機会に登子に逢いたいと思われたが、再び断念されたという「栄華物語」の叙述は誤りだと言うことにな

る。又、登子の同母兄伊尹の歌集である「一条摂政御集」に、彼が参議になった時、登子に贈った歌を載せている。

さいさうになりたまて、ないしのかんのとのに、御いもうと

おりきつるくものうへのみこひしくてあまつそらなる心地こそすれ

「おりきつるくものうへ」とは、蔵人頭を辞したことを言う。伊尹は参議就任と同時に蔵人頭を辞したので、清涼殿に出仕する機会も少なくなって、登子に会いにくくなる。このことを詠んだもので、一首の意は「下りてきた雲の上、即ち、宮中ばかりが恋しくて、貴女にお目にかかることも出来ずに、心はうわの空です。」となろうか。すると、この時、登子は宮中にいた、とみなければなるまい。伊尹の参議就任は天徳四年八月二十二日（「公卿補任」）。安子崩御の四年程前のことになる。これによって、安子崩御まで村上天皇と登子の関係が絶たれていたとする「栄華物語」の叙述は誤りだとすることができよう。猶、「大鏡裏書」や「一代要記」では登子入内を「重明親王薨後。入掖庭」としているが、これは徽子女王の「いかにして」や伊尹の「おりきつる」の歌によってのことではないかと推測する。前述したように、応和二年五月に登子を「ひとりおはすれば」（「多武峯少將物語」）と言っているので、伊尹参議就任の時に登子が宮中にいたのは、公然とではなく密かにに参内していたのであろう。登子は「蜻蛉日記」に「貞観殿の御方」と称されているので、入内後、貞観殿を住居としたと考えられるが、「西宮記」によって典侍潅子が、天徳四年十一月四日、貞観殿の異称である、御匣殿別当であることが分かるので、伊尹参議就任頃、登子が掖庭に入っていたとは考えられない。猶、詞書の「ないしのかんのとの」は、登子をのちの官職で称したと考えられる。

登子と村上天皇の関係は、「大鏡」にのべているように、安子の寛容によって密かに続けられ、安子崩後、登子は入内して貞観殿に住んだと考えられる。猶、重明親王が没後十年の康保元年十一月三十日に度者を三人賜っている（「西宮記」）。このことは、あるいは、登子入内と関係ないかと想像したくなる。

入内後、登子が村上天皇にどんなに愛されたかは「栄華物語」に詳細に描かれるところであるが、一部を引くと「御方〻たまさかにぞ御宿直もある。登華殿の君参り給ひては、つとめての御朝寝・昼寝などあさましきまで世も知らせ給はず御殿籠れば」と、天皇は登子以外の妃達、それに政治までないがしろにされる程ののぼせぶりで、世間の非難を買われた、とある。「大鏡」には、「いみじうときめかせたまひて、貞観殿の尚侍とぞ、申ししかし。世になく覚えおはして、こと女御、御息所そねみたまひしかども、かひなかりけり。これにつけても、『九条殿の御幸ひとぞ、人申しける』」と、「栄華物語」に比べて簡略だし、天皇に対する、世間や実頼の非難は見えず、「九条殿の御幸ひ」と、九条家側から視点をあてているのはおもしろい。猶、

登子の住居は「大鏡」に記している「貞観殿」であったことは、次に引く「蜻蛉日記」の記述によって裏付けられるところである。「蜻蛉日記」に、

陵やなにやと聞くに、時めきたまへる人々いかにと思ひやりきこゆるに、あはれなり。やうやう日ごろになりて、貞観殿の御方に「いかに」などきこえけるついでに、

とある叙述が、貞観殿の御方登子を村上天皇寵妃と認めることの出来る確実な資料と言える。

康保四年五月二十五日、村上天皇は御年四十二歳で崩御せられた。登子が入内してから三年後のことである。まことにはかない掖庭生活であった。

おくれじとうきみさゝぎに思ひいる心は死出の山にやあるらむ

「蜻蛉日記」の作者が贈った弔問の歌に登子が返した歌であるが、この歌に「いと悲しげにて」と記しているように、登子の深い悲しみがあらわれている。

四

村上天皇の掖庭には才媛が揃っていた。芳子の古今集暗唱の件は、後世、定子皇后の話題に上る程有名である（「枕草子」）。徽子女王は「斎宮女御集」を残している。安子、徽子女王、荘子女王、芳子、修子と言った、妃達主催の歌合も行われている。歌合と言うと、史上有名な天徳四年三月三十日の内裏歌合が思い出されるが、これは「女房歌合」で、更衣修子、有序を左右の頭にして行われている。又、源計子の勧めで天皇は梨壺の五人に万葉集の訓釈を命じられたと言う（「十訓抄」）。

このように、掖庭に才媛が揃っていたが、これは村上天皇ご自身の資質に関係するようである。天皇が芳子に古今集の暗唱試験をされたことは既に述べたが、妃達に「逢坂もはては往来の関もゐず尋ねて訪ひこ来なば帰さじ」の歌を送り、彼女達の教養を試験していられる。この時、更衣源計子が薫物を返し、御意に叶ったが、折句とは気付かず、「いみじくしたてて」参上した妃に、「なこその関もあらまほしく」（来ないで欲しい）と、天皇は幻滅されている（「栄華物語」）。又、村上天皇は、月夜、雪を盛った用器に梅の花をさして兵衛の蔵人に送り、彼女に詠歌を所望していられる。これに、兵衛の蔵人は、「雪月花の時」と返奏して、天皇の賞賛を浴びている。この時の天皇のお言葉を見てみよう。

歌などよむは世の常なり。かくをりにあひたることなんいひがたき（「枕草子」）

天皇は兵衛の蔵人の当意即妙の返しが気にいられたのであり、ここに天皇の嗜好があらわれているだろう。

こうした掖庭に入って、登子が寵妃となり得たことは、彼女の教養もかなり高かったであろうと想像される。「栄華物語」

には、彼女について、「御かたちも心もおかしう今めかしうおはしける」と、容貌、人柄ともに優れていた、とある。続いて、「色めかしうさへおはしければ、かゝる事はあるなるべし」と、「色めかしい」性質を追加して、これが村上天皇との密通事件を引き起こした原因であろう、としている。登子と言うと、村上天皇との密通事件で世に有名であって、追加された「色めかしい」性質が彼女のイメージとして強いのではないだろうか。しかし、「栄華物語」や「大鏡」を見ても、登子その人を生きた人間として把握することは難しい。そう言った意味で、「蜻蛉日記」は貴重な資料である。言うまでもないが、「蜻蛉日記」の作者は登子の同母兄兼家室である。

登子は康保四年十二月から翌三月迄、宮中から兼家邸に移住しているが、この間の彼女と「蜻蛉日記」作者（以後、作者とだけ言うことにする）の交流を見てみよう。猶、作者は登子が移住する一月前から兼家邸に住んでいた。

ある者、手まさぐりに、かい・くりを編み立てて、贄にして、こゐつきたるに、にはなせて、持て出でたるを、取りよせて、ある色紙のはしを脛にをしつけて、それに書きつけて、あの御方にたてまつる。

かたこひや苦しかるらむ山がつのあふこなしとは見えぬものから

と、きこえたれば、海松の引き干しの、みじかくちぎりたるを、結ひ集めて、木の先に荷なひかへさせて、ほそかりつるかたの足にも、ことのこゐをも削りつけて、もとのよりも大きにて、返したまへり。見れば、

やまがつのあふこ待ちいでてくらぶればこひまさりけるかたもありけり

正月元日に行われた最初の交流は、木彫りの人形に趣向をこらすことによって、二人の間に機知の応酬が行われたというものである。作者は康保四年三月末に東宮（冷泉院）妃登子にかりの卵を十重ねて贈っているが、登子からは「かず知らずおもふ心にくらぶれば十かさぬるものとやは見る」の歌が返されただけであった。この登子の仕方と登子の仕方とを比べたとき、二人は同母姉妹ではあるが、性格の違いというものが感じられ、登子の方が機知に富んだ応答の出来る人であったと見受けられる。

次に、兼家から登子に遣った手紙を誤って作者の許に届けるという事件が起こっている。手紙を見た作者はそれに細かい字で「松山のさし越えてしもあらじ世をわれによそへてさわぐ波かな」と書き添え、登子におくった。すると、「見たまひてければ、すなはち御かへりあり」と、登子はすぐに返歌している。登子の歌才の程が窺われるところである。安和元年七月の条に、登子から作者に歌が贈られてきたのに始まって、夜通しで合わせて三度の贈答が行われている。この中で、作者が「ことたゆるうつゝやなにぞなかなかに夢はかよひぢありといふものを」と詠んだのに対して、登子から「『ことたゆる』はなにごとぞ。

あなまがまがし」と非難されている。登子は身分的には受領層出の作者の比ではなく、これが影響しているのか、歌作の領域でもどちらかというと登子の方が優位に立つような雰囲気すらあるように感じる。では、前に戻り、兼家の手紙に書き添えた作者の歌に対する登子の返歌を見てみよう。

松島の風にしたがふ波なればよるかたにこそたちまさりけれ

「道綱母の歌のことばを機敏にとらえて詠みながら、歌の内容は巧みにそらせて、兄の兼家をやさしく弁護し、道綱母にも暖かい登子の歌といえましょう」（「形成」昭和五十四年九月号所収　篠塚純子氏「かげろふ日記ノート17」と述べられる通りである。

この事件で思い出されるのが、安和二年七月頃の、愛宮から作者に返した歌を時姫が受け取ると言う事件である。この時、時姫は、「とり入れて、はた、あやしともや思はずありけむ、返りごとなどきこえてけり」と、愛宮からの歌が作者に贈られたものであることに気付かず、愛宮に返事を出したのである。前述の自分の態度とこの時姫の鈍感な態度を比べてみよ、と言わんばかりの様ではないか。それはそれとして、その後の愛宮と作者の交流をみよう。

時姫から返事を貰った愛宮は、「所たがへてけり、いふかひなきことを、またおなじことをも物したらば、伝えても聞くらむに、いとねじけたるべし、いかに心もなく思ふらむとなむ、さわがるゝ」と、慌てふためいている。それを知った作者は、「をかしければ、かくてはやまじと思ひて」自分の方から愛宮に歌を贈っているが、これは愛宮が臨機応変に処置出来ないでいるのを作者の方から救いの手を差し出したというものである。これに対する愛宮の返歌は「ほどへて」作者に届けられている。間違いの起きないように慎重な態度をとった結果ではあるが、やはり興がない。愛宮の返歌に対して、作者は

いときなき手

と、評している。が、愛宮は既に高明室で、年齢も二十七歳より上の筈である(5)ので、筆跡の幼さは年少によるものではない。「枕草子」に、「一には御手を習いたまへ云云」とある、師尹の女子教育を引くまでもなく、「手」は最も重視されたもので、その人の教養を表すものになる。

愛宮は、母が雅子内親王で、登子の異母妹になる。作者がこの愛宮を相手にした時と登子を相手にした時とをくらべると、愛宮は作者に完全にリードされているが、登子は作者に優るとも劣るとは言えない応答をしている。

作者が参内間際の登子を訪問した時の話はおもしろい。この時丁度、兼家が作者を訪うている。早速、登子は作者に帰宅を勧める。が、作者はそれを承諾しない。すると、「よひまどひし給ふやうに聞ゆるを、論なうむつかられ給はばや」と、ユーモアに溢れる即妙の言を登子が発したのである。「乳母なくとも」と作者が答える。呼吸の合った巧みな応酬となっている。

天禄二年六月に、登子が上書きに「東の大里より」と書いているのも、作者が「西山より」と書いたのをうけてかいた洒落である。

以上のことから、登子は歌才があり、当意即妙の機知にも富む社交上手の女性であったと言える。こういう面は村上天皇の嗜好によく叶っていて、寵妃になり得た理由の一つと考えられる。

登子は作者の不幸にも真実の同情をよせている。

夫兼家の途絶えに悩み、山籠りした作者が兼家に強引に連れ戻された直後、登子からの手紙を受け取っている。

などかは、さ繁さまざるすさびをもし給ふらむ。されど、それにも障りたまはぬ人もありと聞く物を、もてはなれたるさまにのみいひなしたまふめれば、いかなるぞと、おぼつかなきにつけても、

妹背川むかしながらのなかならば人のゆききの影はみてまし

この手紙を受け取った作者は、「いとあはれなるさまにのたまへり」と、ひどく感動している。「もてはなれたるさまにのみいひなしたまふめれば」とあるので、作者は登子に夫婦仲の悩みを訴えていたらしい（「蜻蛉日記全注釈」）。これは義妹という親しみもあるだろうが、文面から窺えるように、登子は作者の不幸を心から心配してくれる、思いやりの深さを持った人であったからだろう。

これが天禄二年七月のことだから、九年前になるが、高光出家によって、悲嘆にくれる彼の同母妹愛宮や妻に登子が慰めの手紙を遣っているのを「多武峯少將物語」に記している。

誰も誰も御はらからの君たち、この愛宮の泣き悲しび給ふを聞き給ひて、あはれがりきこえ給ふも、物を聞えておはしふる。ときどき故式部卿の北の方は、ときどきとぶらひきこえ給ひける。

泣き悲しんでいる愛宮に手紙を遣ったのは姉妹の中で登子一人であった。他の姉妹は気の毒には思ったものの、手紙を遣りまではしなかった。又、登子は高光室にも、「かく常に問はせ給ふことなむ、つきせぬことには」と、常に手紙を出していたことが高光室の返事から知られる。

これらのことは、登子が人の悲しみに深い同情を寄せる人であったことをあらわしているだろう。

かたらはぬさきよりなきつほととぎすもののあはれを知れりと思へば

これは登子の歌「あはれなることかたらひてほととぎすもろごゑにこそなかまほしけれ」に対する高光室の返歌であるが、登子が「もののあはれを知れり」といわれていることは注目せられる。

登子は、母盛子を最初に亡くして以来、夫重明親王、妹（四女）、父師輔、姉安子、夫村上天皇、妹高明室（三女）、兄弟忠君、兄伊尹の九人に次々に先立たれている。多くの肉親との

死別は登子の人となりに影響を及ぼしているに違いない。
登子は「蜻蛉日記」の作者も一目置く程に歌才があり、機知にも富み、思いやりの深さを合わせもっていた人であったと見ることが出来る。

五

まことにはかない登子の掖庭生活であったが、彼女が村上天皇最晩年の寵妃であったことはしっかりおさえておくべきだろう。登子は、「大鏡裏書」によると、「安和二年十月十日任尚侍。同九月叙従四位上。天禄元年十一月叙従三位。天延元年正月叙従二位。同三年三月二十九日薨」と、円融院時代に尚侍となって、位も順調に進んでおり、厚遇されていたようである。最初の記述の従四位上、その直後の尚侍就任は、その直前、安和二年九月二十三日に円融院の即位が行われているので、これとの関係が考えられる。「蜻蛉日記」の、登子が康保四年十二月下旬に宮中を退出して翌三月頃まで作者の住む兼家邸に滞在したときの叙述の中に、

この御方、東宮の御おやのごとして、候ひ給へば、まゐり給ひぬべし

と、登子が東宮守平親王（円融院）に母代として付添っていたことを記している。このことから、円融院即位直後の、登子の官位昇進の理由が明らかになる。前述したように、登子は安子の同母妹であるから、母后を亡くした守平親王には一番親しみを覚える人であったろう。立坊の時、守平親王は九歳であったから、まだ母親のいる年齢であった。再び未亡人となった登子が慣れた宮中で守平親王に母代として付き添うことは適切なことであったろう。が、守平親王の立坊が、同母兄為平親王を越えて行われたというものであったことを思うとき、登子が村上天皇最晩年の寵妃であったことに注意すべきであろうと思う。私は、守平親王立坊に登子が一役買っているのではないかと思う。

兼家が守平親王立坊に関与していることは「大鏡」に述べるところである。彼は、守平親王が立坊すると、東宮権亮（「公卿補任」）に任じられていることや、親王家別当（「九暦抄」「村上天皇御記」）として早くから親王とは親しかったと思われるから、守平親王の立坊に関与した人物として揚げられて当然であろう。前述したように、登子は康保四年十二月下旬から三ヶ月程、宮中から兼家邸に移住していることから、登子と兼家の親密な関係が推察される。最も、二人は同母の兄妹であるし、また、東宮権亮である兼家が東宮の母代である登子を受け入れるのは当然のことかもしれない。が、やはり、「蜻蛉日記」の安和元年三月の条に、「年ごろ見給ひ馴れにたれば」と、長年、登子が兼家に親しくしていると記されているところから思うに、守平親王立坊計画を抱く兼家を助けて、寵妃の登子が村

上天皇に守平親王立坊を勧めた可能性は大きいのではないか。

話は前に戻るが、登子入内の時の様子を「栄華物語」には、入内を躊躇する彼女に村上天皇の命を受けた兄達が入内を勧めるのに「今はじめたる御事にもあらざなるを」と、登子の身になるということなどまるでなく、自分達だけの利害を考えているようなことばを発している。安子亡き後、登子が兄伊尹・兼通・兼家にとって後宮政策上、必要とされたことは確かだろう。そこで、登子と兄達の関係をみてみよう。

伊尹は、登子には一番上の同母兄で、十歳ぐらい年上であったと思われる。前に述べたように、登子の結婚三日の祝議に伊尹が出席していることや、彼が参議になった時、登子に歌を贈っていることが資料から知られる。

伊尹は康保四年正月二十日に六年五ヶ月ぶりに参議から権中納言に昇進した（「公卿補任」）。が、前年十一月二十五日に右大臣源高明が娘を為平親王に入れており（「村上天皇御記」）、甥の東宮（冷泉院）は「皇太子始悩心。非尋常。自今日及四月」（「日本紀略」康保四・二・十七）と、精神病が起こり、これが村上天皇崩御直前の状況であったから、危機感を抱いていたに違いない。次期東宮に守平親王を決めておけば安心することが出来るのである。兼家と心を合わせて、登子を利用したと思われる。

兼通は、伊尹より一歳下の同母兄である。彼と登子の関係で注目されるのは、兼通の息子朝光と登子の娘とが結婚していることである。二人の間には、朝経・相任・登明・姫子（姚子とも）がうまれている（「尊卑分脈」）。生年は、朝経が天延元年(6)、姫子が天禄二年(7)であり、他の二人は不明。これによって、朝光と登子の娘の結婚は天禄二年以前だということになる。猶、天禄二年、朝光は二十一歳(8)、登子の娘は十七から二十三歳(9)であるから、結婚は天禄二年より数年早いとみた方がよいかもしれない。

「蜻蛉日記」の天禄元年六月の条に、「さるまじき御中のたがひにたれば、ここをも気疎くおぼすにやあらむ」と、兼家と登子の仲たがいのことが記されている。この仲たがいの原因は、登子が兼家と犬猿の仲である兼通の息子朝光を婿にしたことにあるのではないか。

兼通が伊尹の後を継いで政権担当者になれたことに就いては、外戚であることと安子の遺命によるものであるといわれている（「親信卿記」）。私は、円融院の母代である尚侍登子の援助もあったのではないかと想像する。登子は天禄四年正月八日、従二位に叙せられた(10)が、前年十一月二十七日に兼通が内大臣となって、政権を掌握していることと関係があるように思えるからである。

ところで、朝光はのちに延光未亡人に通うようになって、登子の娘を捨てる。その理由を「大鏡」に登子の娘が「不合」であるからとしている。朝光が延光未亡人に通うようになるのは、延光の薨じた天延四年六月十七日より以後のこと。延光の薨じ

た翌貞元二年十一月八日に兼通が薨じている。恐らく、この後であろう。すると、登子は天延三年三月二十九日に薨じているから、父重明親王も早く、天暦八年に薨じていて、誰も登子の娘を後見する人がいない。彼女が経済的困難に至った事情がここにある。彼女が朝光との間に設けた姫子は、永観二年十二月五日、花山院の掖庭に入り、一月程、寵幸を受けたが、その後、全く顧みられず退出し（「栄華物語」）、五年後、永祚元年五月二十九日、十九歳の若さで卒去した（「小右記」）。

天延三年三月二十九日、登子は薨じた。四十一、二歳であったろう。ところで、彼女には贈位が行われていない。例えば、尚侍藤原貴子は従二位から従一位をおくられている（「日本紀略」）。貴子の贈位の理由は「貴子延喜年中入太子宮。太子薨後守貞節。天暦之間父相国薨。執孝道殊篤。仍雖非当時親戚功労之人。為美其節操所贈也。」（「村上天皇御記」）とある。この理由を見て思うに、登子の場合、「当時親戚功労之人」に該当するのではないか。彼女は円融院の母代であったのだから。

資料が少ないので円融院との関係がもう一つ分からない。猶、「村上天皇御集」にもだが「円融院御集」に登子は登場しない。

注

(1)関白右大臣正二位藤原朝臣道兼薨。年三十五。（「日本紀略」長徳元・五・八）から逆算すると、応和元年生になる。

(2)室正五位下藤原朝臣寛子卒、年四十、太政大臣第二女（「吏部王記」天慶八・正・十八）

(3)さて後、（天皇は登子と）御心は通はせたまひける御けしきなれど、さのみはいかがとや思し召しけむ、后さらぬことだに、この方ざまは、なだらかにもえつくりあへさせたまはざめる中に、ましてこれはよそのことよりは、心づきなうも思し召すべけれど、御あたりをひろうかへりみたまふ御心深さに、人の御ため聞きにくくうたてあれば、なだらかに色にも出でず、過させたまひけるこそ、いとかたじけなうかなしきことなれな。さて后の宮うせおはしまして後に、召しとりて、いみじうときめかせたまひて、貞観殿の尚侍とぞ、申ししかし（「大鏡」）

(4)「御こころのおもはずなりける—具体的にどういうことを指すのか、分らないが（略）村上帝との間柄を指すのかもしれない」（「斎宮女御集注釈」）とされているが、歌の内容は男女間のことを言ったと解され、登子と天皇以外の男性との関係は伝えられないので、天皇と登子のことと取りたい。

(5)五女愛宮は六女尉子の母盛子の卒去した天慶六年より以前の生年となり、これに加算した。

(6)前中納言正三位藤原朝経出家　年五十七。（「日本紀略」長元二・七・三）から逆算。

(7)左大将女御午時許逝去云云、干時年十九、（「小右記」

永祚元・五・二十九）から逆算。猶、左大将は朝光（「公卿補任」）。

(8)正二位大納言藤原朝臣朝光薨。年四十五。（「日本紀略」長保元・三・二十）から逆算。

(9)登子の娘は、重明親王と登子が結婚した翌天暦三年から親王薨去の翌天暦九年の誕生と考えて、これに加算した。

(10)「大鏡裏書」では「天延元年正月」とするだけだが、「日本紀略」の天延元年正月八日の条に「女叙位」と記されているので、この日の叙位と考えられる。

（大谷女子大学助手）

伊井春樹編

国語教師のパソコン

パソコンへの招待

第一章　教育とコンピュータ

第二章　国語教師のワープロ

第三章　データベースを活用した国語教育

第四章　奥の細道とプログラミング

第五章　学習指導のためのコンピュータ

第六章　国語教師と電子文具

A5版　三一五頁、エデュカ（株）三、八〇〇円

古筆切資料集成（全六巻）

巻一　勅撰集上（古今集）　既刊

巻二　勅撰集下（後撰集―新続古今集）

巻三　私撰集・朗詠集

巻四　私家集

巻五　散文・歌合・詠草類

巻六　補遺・索引

A5版　各巻約四五〇頁　平均八、〇〇〇円

年二回配本　思文閣出版